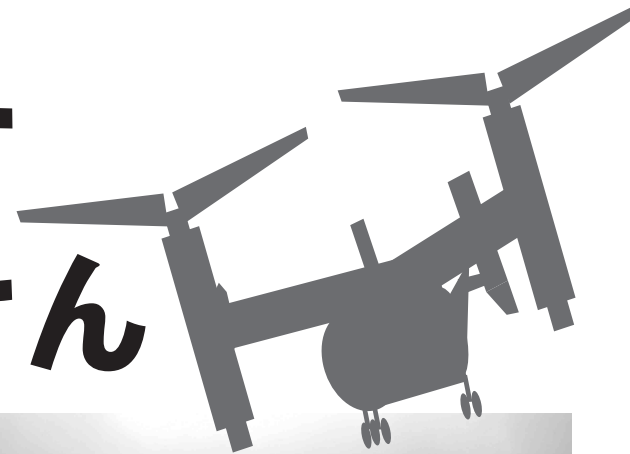


アセスメントに反対です 辺野古に基地はいりません



沖縄県宜野湾市の中心にある米海兵隊の普天間基地。この基地は、市の面積の25パーセントを占めることで発展を妨げ、昼夜を問わず爆音で住民を苦しめてきました。基地撤去を求める県民世論に押され、日米政府が基地の移転で合意したのは1996年のことです。移転先は名護市の辺野古とされました。

しかし基地を辺野古に移転しても、危険が無くなるわけではありません。また辺野古は、絶滅危惧種のジュゴンや、希少生物がたくさん生息する地域です。基地を押し付けられた地元の人々や、環境を守ろうとする人々、県内外の支援者は、長く反対運動を続けてきました。そのため、移転決定から15年経っても、日本政府は工事を始めることができませんでした。

この間に政府が行ったのは、沖縄県の合意を得ないまま、基地建設の前提となる環境影響評価（アセスメント）に着手することだけでした。そのアセスメントも、2009年の総選挙で政権交代が実現し、鳩山由紀夫総理が基地の移転先の見直しを表明したことで中断されていたのです。

しかし、野田佳彦総理の誕生で、事態は大きく動き出しました。野田内閣は、中断していたアセスメントの再開を表明したのです。沖縄県知事・沖縄県議会・名護市長・名護市議会と、関係四者は全て基地の県内移転に反対です。また世論調査では、県民の84パーセントが反対しています。その沖縄に基地建設を押し付けることは、決して許されることはありません。

私たちは、アセスメントの再開に反対します。



辺野古の海岸に米軍が建設したフェンス。手前が民有地で奥が米軍基地。フェンスには様々な団体から届けられたメッセージが掲げられている。

連絡先